

三本足の馬

台湾現代小説選Ⅲ



三本足の馬

台灣現代小說選Ⅲ

鄭	清	文
李		喬
陳	映	真

研 文 出 版

松永正義（まつながまさよし） 1949年東京生まれ。成蹊高校教員。 主要論文「台湾領有論の系譜——一八七四（明治七）年の台湾出兵を中心に」（『台湾近現代史研究』1号，1978. 4），「近代文学形成の構図——政治小説の位置をめぐる」（『東洋文化』61号，1981. 3），「中国文学全体の未来における一つの可能性をみる——台湾文学の現在（陳映真の場合）」（『凱風』10・11合併号，1984. 7）など

研文選書 23

三本足の馬——台湾現代小説選Ⅲ——

1985年 4月10日 初版第1刷発行

定価 1500 円

訳 者 松永正義ほか

発 行 者 山本敬太郎

発 行 所 研文出版（山本書店出版部）

〒東京都千代田区神田神保町 2-7

郵便番号 101 振替東京 0-59950

電話 東京（03）261-9337

印 刷 清水印刷所

カバ ー モリモト印刷

製 本 大口製本

© M. Matsunaga 1985 Printed in Japan

ISBN 4-87636-054-5

目次

三本足の馬

鄭清文／中村ふじゑ訳 1

小説

李喬／松永正義訳 51

山道

陳映真／岡崎郁子訳 117

〈解説〉語られはじめた現代史の沃野

若林正文 167

三本足の馬

鄭 清 文
中村ふじゑ訳

鄭 清 文 (チョン チンウェン)

一九三二年、桃園の生まれ。生まれてすぐ、母方の伯父の養子となる。五一年、台北商業職業学校高商部卒業、華南銀行に就職。五四年、台湾大学法学院商学系に入学。台大卒業後、一年半の軍役を経て、六〇年に華南銀行に復職、現在に至る。そのかわら、五八年の処女作発表以来、中断することなく創作活動を続けている。平明、簡潔な文体で、日常の小さな悲劇を描きながら、人間の普遍的な悲しみや愛情を浮かび上がらせる短篇の味わいには、台湾の現実を描きながら、過度の歴史意識にとらわれない、独特のものがある。

六〇年代の終わりがら、高度成長後の台湾の現実のなかで、機構の網の目からはじき出され、あるいは自己を見失いながら、そこで生きていくほかにない都市生活者を描く一連の作品を発表し、世評が高い。本篇はそれらと並行して書かれた台北近郊の小さな町旧鎮を舞台に、歴史の転変のなかにある人々のさまざまの生きかたを描いた短篇群のひとつである。

六八年に「門」で第四回台湾文学賞を受けた。谷風、莊園などの筆名がある。

短篇小説集に『鍬箕谷』、『故事』、『校園裏の椰子樹』、『鄭清文自選集』、『現代英雄』(のち『龐大的影子』と解題)、『最後の紳士』、『局外人』、長篇小説に『峽地』、『大火』があるが、単行本未収録の作品も多い。また、プーシキン、ベケット、チェホフなどの翻訳がある。

鄭清文については、林柏燕「評介鄭清文的小説」、葉石濤「評・校園裏の椰子樹」などの他、『台湾文芸』革新第三期と『文学界』第二集に特集がある。

本篇は原題「三脚馬」、初出は『台湾文芸』革新第九期(一九七九・三)。のち『台湾文芸小説選』(台湾文芸出版社、一九八一・五)所収。

わたしは台北から三時間、車を走らせて、外莊^{ワイヅァン}に、工專時代の友人頼国霖^{ライクワオリン}を訪ねた。ついこのあいだ同窓会があって、卒業以来二十数年ぶりに、彼と再会した。同窓会で自己紹介をしたあつたとき、彼が故郷へ帰って木彫工場をはじめていて、各種の木彫の製造販売をしていることを知ったのだった。

工場の規模はかなり大きくて、敷地は二〇〇坪以上もあり、前方は店舗を兼ねていた。わたしがここにやってきた主たる目的は、馬の彫刻をさがしたかったからだ。わたしは長年、馬のコレクションをしていて、木彫のや、石刻のや、大きいのや、小さいのや、もう、二〇〇〇点以上も集めている。今年は午年^{うまどし}なので、コレクションには絶好のチャンスなのだ。

頼国霖は、かなりの木彫を見せてくれた。大量生産をしているせいか、彫刻はどれも規格化されすぎていた。わたしたちは、歩きながら見ていた。不意に、壁のすみに置いてある一匹の変わった馬が、わたしの目をひいた。その馬は、こうべを垂れて、草をはんでいるようでもあり、そうでないようでもある。その表情には一抹の暗さがあり、非常に苦しんでいるようでも

あり、なにかを恥じているようでもあった。わたしはかなりの馬を集めたけれど、いまだかつて、このような表情の馬を見たことがなかった。おそらく、絵画にも見ることはできないだろう。

わたしは手にとって、しげしげと見つめた。それは足を一本なくした馬だった。驚きと痛惜がわたしを襲った。体の線を見れば、ほかのどの馬よりも生き生きとしていて、とりわけその顔の表情は、ほかのものはおよびもつかない。それは、削りっぱなしの、なにも塗っていないもので、ヤスリすらかけてなく、刀のあとまで残っていた。人目につかないところに置かれていたことから察すると、重要視されていないようである。わたしがしきりに撫でまわして、手放そうとしないのを見ると、頼国霖がいった。

「それを彫ったのは変わった男でね、三本足の馬を彫りたがるんだ。われわれが買いつけに行くと、製品が足りないときなんかは、そいつを混せて寄こすんだよ。もっと作ったら取り替えるから、売っちゃいかん、といってね。だから、つり銭みたいに、行ったり来たりしているのさ」

「その男の彫ったの、ほかにもあるの？　つまり、普通の馬のことだけど」

「あるよ、これがそうさ」

頼国霖は、むぞうさに一匹の馬を取り上げて、わたしに見せた。

「どう？」

「変だなあ。ほかの馬と変わらない。見本の型どおりにつくったせいかなあ。だが、この馬の目は、ほかの馬の目とはちがう。ほら、ほかの馬の目は顔の横についているけど、この馬の目は前についている。それに、たてがみも、しっぽも、太もも、もちがつている。だけど、あの三本足の馬にはおよびもつかない。この、三本足の馬には動きがある、生きた馬だ、それに表情もある。動物の表情を表現するのは、じっさい難しいんだなあ」

「あの男の作った馬は、みんな、うちでは修正しているんだよ。あの男は怠けすぎると、わたしたちはよくいうんだ、ヤスリすらかけないんだから。だから、うちじゃ、あの男の工賃は安くしている」

「その人の製品は多いの？」

「さあ……どういったらいいか。なにしろ、ひっちらかした山のなかにいるんだから、どれが製品で、どれが製品でないのか、わかったもんじゃない。だけど、うちで要るものはだんだん少なくなってきたね、以前には週一回取りに行っていたのが、いまじゃ、三週間に一度……ひと月に一度がやっと、ってこともある。まともな仕事はしようとしてしないで、ひとりで閉じこもって奇妙なものを彫っているんだ」

「ほんとに売らないの、あの三本足の馬なんかを？」

「わからないなあ。あの変わり者が、なにを考えてるのか」

「その男に会わせてくれない？」

「会いに行くって？ なにをしに？」

「なにか特別なものがあつたら見たいと思つて」

「特別なもの？」

「つまり、三本足の馬みたいな奇妙なものが」

頼国霖は、わたしをオートバイの後ろに乗せた。つづら折りにくねった山道を三〇分ほど走つて、峠に出たとき、彼は車を停めた。見下ろすと、連なる山やまのあいだに、一カ所、わりあい平坦なところがあつて、二〇戸ほどの民家が、くつついたり、離れたりして、散らばつていた。

「あれが深埔村だ」

頼国霖は、こういうと、またオートバイを走らせて、坂道をくだつた。

それは非常に粗末な土の家だった。土壁はすでに崩れかけ、なかの藁わらがはみだして、まるでシャクトリ虫が出てきたようであつた。この家にはわき部屋ツンデインと正庁ツンデインがあつて、正庁も土壁だが、そこだけが石灰で上塗りしてあつて、多少はきれに見える。

戸は、なかば閉じられていた。頼国霖が軽く押した。なかに入ると、木の香が鼻をつく。戸外の強い日ざしのもとにいて、急に薄暗い部屋に入ると、しばらくはなにも見えない。たたずんでみると、竹格子の小窓の下に、六十を越した老人が座っているのがしだいに見えてきた。白いものが混じつた髪の毛は短く刈りこんであるが、ひげは、もう、五、六分に伸びていた。

「国霖かい？」

「ああ。お客さんを連れて来たんだよ、吉祥ナシヤンじいさん」

「お客さんだつて？　どこの人かい？」

彼はわたしのほうを、ちらっと眺めた。

「台北からさ」

「台北市かね？」

「そうだよ」

頼国霖がいった。

目が慣れてくると、わたしは周囲を見まわした。窓の下の一尺ほどの高さの仕事台の上には、槌と各種の彫刻刀が置かれている。老人は小さな平たい板に座って、両足をかすかに曲げ、前こごみになっていた。太ももの間には、まだなにもとも知れない木のかたまりがはさまれている。あたりは一面木くずだらけで、部屋のすみには、むぞうさに作品が積まれていた。

その作品を、わたしがまだよく見ないうちに、老人は、また口を開いた。

「あんたの友だちは、台北から来たのかね？」

「そうだよ。台北の学校へ行ってたときの友だちだよ」

「それじゃ、台北のはずれに、旧鎮チヨウツェンというところがあるの知ってるかね？」

「ぼくは旧鎮の出でですよ。三十年間あそこで暮らして、十なん年か前に、台北に引っ越した

んですよ」

「旧鎮のどこに家があったのかね？」

「警察分局の向かいに」

「警察分局ってのは、むかしの郡役所のことかい？」

「そう」

「あんたの年と、住んでいたところからすると、わたしを知っているはずだが……」

彼はそういつて、ゆっくりとわたしのほうを向いた。

「ぼくが、あなたを知っているんですって？」

「まだ、わからないかね？」

彼は、自分の鼻すじをさしながらいった。一種の皮膚病であろうか、眉間から鼻の頭へかけて、白いすじが通っていた。

「もしかして……」

「わかったかい？ 白鼻のタヌキだよ。ところで、あんたは、どこのがれかね？」

わたしは父親の名を告げ、むかし父親が指物師さしものしをしていたことを話した。

「覚えているよ。むかし、あんたのおやじさんを殴ったことがある」

「知ってます。おやじがいつてました」

「おやじさんは、まだ、たっしやかね？」

「いえ、もう亡くなりました」

「なにか、おれのこと、いってなかったかね」

「……」

「いってみな、気にしないから」

「三本足は、四本足より、もっとひどいと……」

彼はしばらく黙っていたが、やがて仕事台から、四、五寸ほどの額縁に入った写真を取り上げた。

「わかるかい？」

「いいえ」

「女房なんだ」

「たしか、この人の姉さんと妹さんは、学校の先生になったでしょう？」

「そうなんだよ」

「この人は？」

わたしは、左下のすみにある、もう黄ばんでしまった二寸ばかりの写真を指さした。

「これは、おれのはじめての写真だよ。最初に台北に行ったときに写して、おふくろに送ったものだ」

写真の顔は、坊主頭だった。わたしは気をつけて鼻のところを見ただけで、あの白いすじは

見つからなかった。彼は察したようにいった。

「写真屋が修正したんだよ。そのために、五銭多くとられたんだ」

「そんなに小さいうちから、そうだったんですか？」

「ああ、ずいぶん小さいころから……」

一

「黒足タヌキ、白鼻タヌキ、ヤーイ、ヤーイ」

餓鬼大将の阿狗^{アコ}が率いる五人組は、手に手にコマを持って、駆けるようにして、墓場のほうに歩いていった。この五人のなかでいちばん小さい阿河^{アヘ}よりも、さらに頭半分ほど小さい阿祥^{アセザン}は、五人の後ろに、びったりとくっついていった。

「おい、白鼻のタヌキ。帰れよ。金魚のうんこみたいに、ついてくるなよ」

しんがりの阿金^{アキム}が大声でいうと、手にしたコマを勢いよくまわした。

「おれだって、持ってるさ……」

阿祥はいった。厳しい寒さで、吐く息が白かった。

「なにを持ってるんだい。チンポコかい？」
阿成^{アセ}がいった。

「おれだって、コマを持ってるさ」

「どんなコマだい？ 自分でこきえたのか？ キンタマより小さいじゃねえか！」

阿進^{アチン}がいった。

「おじさんが、このぐらい大きいのを買ってくれるっていったんだから！」

阿祥は、手で茶碗ほどの大きさを示した。

「買ってもらってからいえよ」

阿金がいった。

「おじさんは、台北にいるんだぞ」

「台北がそんなに珍しいかよ」

「帰れよ。帰らないと、ズボンをはぎ取ってやるぞ」

阿祥は、片手でコマを握り、片手でズボンの腰のところを引っぱっていた。阿祥のズボンは、布のヒモで結わえてあった。阿祥はまだ小さすぎて、大人のように器用に腰のあたりを折りたたんで、差しこむことができなかった。

「帰れよ」

阿金が振り返って、阿祥をこづいた。阿祥は一步しりぞいた。

阿金は阿福^{アホッ}おじさんの末っ子である。阿祥のことを最初に「白鼻のタヌキ」と呼んだのが、ほかならぬ阿金であった。

あるとき、阿福おじさんが、山で一匹のタヌキを捕まえてきた。そのタヌキは、鉄のかごに入れられて、売られていくのを待っていた。黒みを帯びた黄色い毛で、赤みがかったまあるい鼻のてっぺんにかけて、長く白いすじが通っていた。足の一本は、ワナにはさまれて、ひきちぎれ、ぎこちなく体を動かしながら歩くのだった。

「おまえも白鼻のタヌキだ！」

突然、阿金が阿祥の鼻を指さした。

それ以来、みんなが阿祥を白鼻のタヌキと呼びだした。まるで、彼の名前を忘れてしまったかのように……

五人が竹やぶの向こうに曲がっていくのを、阿祥は気がぬけたように見送った。

彼は、手を高くあげると、持っていたコマを地面にうちおろした。コマはうまく回らず、横に倒れた。

「くそ！ 役たたず！」

阿祥はコマにやつあたりした。

コマを拾いあげると、ヒモをしっかりと巻きつけて、もと来た道を引き返した。奇特な人が道ゆく人のために道ばたに用意しておいた茶を見つけると、しゃがみこんで、猛烈な勢いで二杯飲んだ。

阿祥は、阿福おじさんの畑のところまで引き返してきた。もともと、ここは四方が山に囲ま

れた耕地で、瘦^うせた赤土に、人々はさつまいもや、キャッサバ、落花生を植えていた。阿福おじさんばかりが、しばしば村の外へ出かけ、よその人の意見をとりいれてきては、小さな丘の半分ちかくを切り開いて、いささかの野菜を植えていた。

阿祥は、ちょっと下腹がふくらんできたのを覚え、畑のところで小便が出るのを待っていた。植えてからひと月ほどになる白菜が、葉を巻きはじめていた。畑のきわの三株は、葉がすっかり黄ばんでいた。

阿金じゃなけりや、ほかにだれが白鼻のタヌキなんていうもんか——阿祥は思った。

冷たい風がま正面から吹いてきて、竹を鳴らしていく。阿祥はちよつと身を縮めた。下腹が、さらにふくらんできた。あたりを見回して、だれもないのを確かめると、す早くズボンを引き下ろして、下腹に力を入れた。小便が、勢いよく煙をたてて、四番目の白菜に注がれた。葉っぱが濡れ、芯が濡れた。阿祥は一株の白菜に、力いっぱい集中攻撃を浴びせた。小便は土の上に泡だち、すぐに消えていった。阿祥は身体じゅうがさっぱりした。もしもだれかに見られたら、こやしをやっていたといおう。

「ヤイ！」突然、だれかが竹の間からおどり出た。

阿祥は身振いした。だれなのか確かめないうちに、小便のほうは止まっていた。

飛び出してきたのは、阿狗、阿金らの五人組ではないか！ 阿祥は自分の目をうたがった。いったい、どうして、この連中が先まわりして、ここに隠れていることができたのか！